

人生には慶事と呼ばれる事があります。誕生日、入学、七五三、成人、還暦、古希などいろいろです。それらたくさんある中で、一番大きな慶事としてあげられるのがたぶん結婚式です。他の慶事はすべて個人に属するものですが、結婚式だけは個人に属しながらも相手があり、その先に相手の親があり、こちらの親もあり、さらに様々な人間関係が連なっています。個人の慶事でありながら、もともと社会性を帯びているのが結婚式です。だから大勢の人をお招きし、お祝い事とすれば一番大きな慶事になるわけです。

ポラリス Polaris

そんな結婚式ですが、近年その中味に大変大きな変化が起きました。わたしは結婚式場の経営に携わって三十三年になりますので、たくさん結婚式に接してきましたが、そのことを痛切に感じています。物事が変化する裏には、必ずそれを引き起こす内的な要因が潜んでいます。それは世の中全体の動きと無関係ではありません。結婚式の事情から今の世情を推し計ることも出来るはずですが、



いまどきの

結婚式から

見る世情

北 嶋 正 (昭和41年卒)
株式会社 イヤタカ代表取締役社長

を聞いた父親が、少し間を置いて、「おまえらがそういうのであれば、それでもいいな、考えてみれば親として仲人に挨拶する面倒もなくなるし……」そんな返答が帰ってきたのです。その頃はまだ仲人を立てるのが一般的でしたので、親の反応は、「そんなこと言っても」とたしなめる役になるのが普通のはずでした。それが子供に同調したのでしたら、ビックリしてしまいました。

た。そんなエピソードがあった数年後には、仲人の姿はほとんど消えておりました。わたしは親の変化が結婚式のスタイルを劇的に変えた一番の要因だと信じています。ちょうど戦後育ち、戦後生まれの世代が結婚式に親として登場する時期と、それは見事なほど重なります。戦後世代に共通の価値観は、民主主義とそれを支える個人意識の尊重です。結婚式は、ますます個に向かっています。二人らしい結婚式、オリジナルな結婚式、といううたい文句で、私も式場側もそうした傾向に答えます。個をベースにすると、それまでの社会通念や因習、そして自分の意から外れる人間関係など、全てが面倒くさく、うつつうしいものを感じてしまいます。自分が主ですから、自分の好みこそが大事になります。本来社会性のあった結婚式が、個性表現の名のもとに、ますます多種多様、趣味趣向化に向かいつつあります。そんな傾向がいかにか悪いとかではありませんが、戦前のような国への帰属強要は論外ですが、自分の親や故郷、学んだ学校などへの愛着や帰属意識まで薄くなるようでは、逆に個の確立も遠ざかってしまふのではないかと懸念してしまいます。人間は誰でも自分の意思を超えたものに規定される部分がある存在です。その自覚があつてはじめて個が芽生えるはずですが、いまどきの結婚式の現状に接していて、根の生えていない個人意識だけが漂う世情を感じて、少し心配してしまいます。

天上天下

秋高生なら誰もが一度は憧れる東京大学では、年収が約四百万円未満の家庭の子女であれば誰でも授業料(年額五万五千円)を全額免除する制度をこの四月からスタートさせる。これまで国が実施してきた減免制度に加え、新たに東大独自の財源で免除枠を拡大したものである。しかし、大学の独立行政法人化以来、旧帝大など一部の「金持ち」大学を除き、地方の大学を中心に多くの大学は、東大のような独自の財源や財力を有しているわけではない。また、もともと国立より低水準にある私立大学の学費免除制度は、改善の方向すら見られないままである。▼昨今、さまざまな分野で格差が拡大し、社会全体の劣化が憂慮され始めている。教育界もその例外ではなく、「大学難民」「教育難民」が着実に増加しつつある。中でも私立大学では、毎年一人を越える学生が経済的理由で学窓を去っていくとも報道されている。▼「すべて国民は、……その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する」と謳っている憲法第二六条の精神を改めて思い起こしてみる必要があるであろう。